

第23回 男女平等と女性の幸せ

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。助教、国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、「統計データはためになる!」(技術評論社、2012年)等。



結局のところ幸せに暮らしているのは男か女か

男女の幸福度については、本連載の第7回(2012年1月)に取り上げ、紛争国や日本など東アジア諸国で女性の幸福度が男性の幸福度を上回っていることにふれた。これは、あなたは幸せですかという質問への答えが男と女でどう異なるかを見たものだった。その後、直接、各人に、男と女でどちらがより良い生活(Better Life)を送っているか(すなわち、幸せに暮らしているか)をきいた国際意識調査が見つかったので、まず、この調査の結果を掲げることにする(図1)。

世界22か国のこの点に関する調査結果は国により様々であるが、多くの国民は、男の方が幸せに暮らしていると考えている。その中でも、「男」と答えた人の比率から「女」と答えた人の比率を引いた値が最も高いのは、フランスであり、その差は、61%ポイントにも達している。欧米主要国の中では、フランスに続いてドイツ、英国、米国と、「女」と答える人の比率は余り

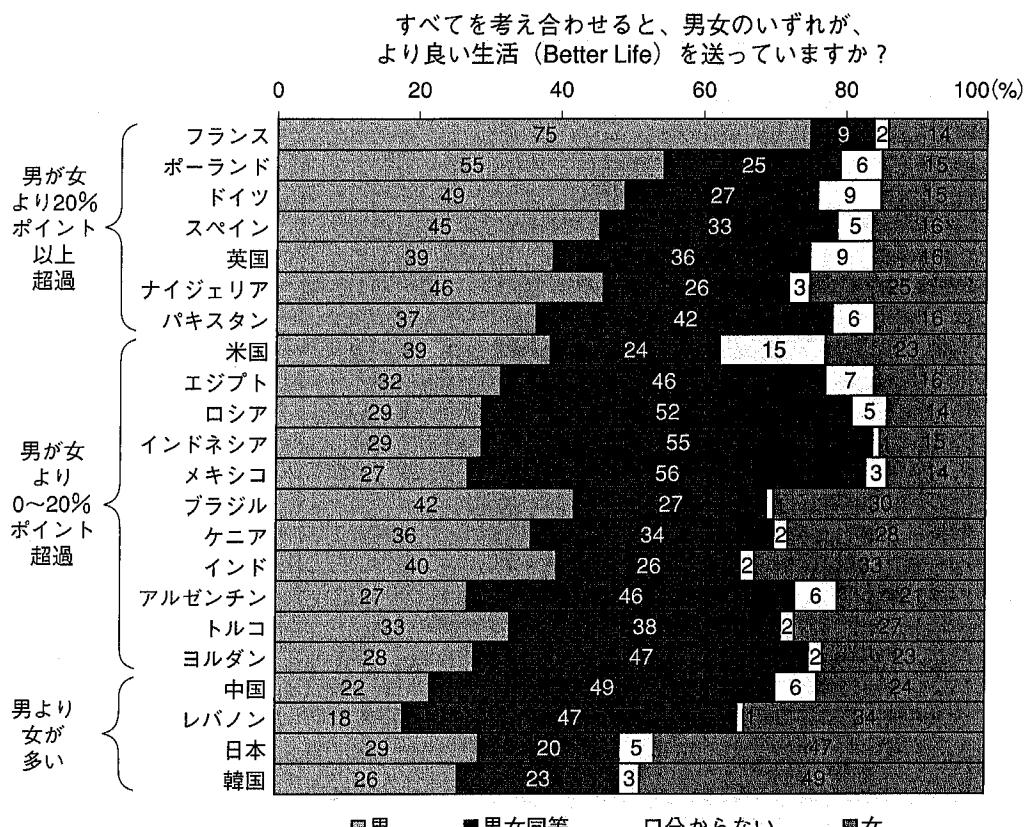
変わらないが、「男」と答える人がどんどん減ってくるので、差の値はどんどん低くなっていく。

日本と韓国では、この値が逆転、すなわち女性の方が男性より幸せに暮らしていると考えられており、しかもその程度が大きい点で世界の中でも目立っている。

こうした結果自体が非常に興味深い。日本と韓国といつかつて儒教の影響が強かった国で、先進国の中で幸せ度の女性優位が目立っているのはどうしてかというと、私は、核家族化が進み、女性は「家」の束縛からかなり解放されたのに、男性はまだ「家」を支えなければならぬという強迫観念に囚われているからだと考えている。

なお、フランスで「男」と答える人は、男女別には、それぞれ、69%、80%と女性の方が多いが、他の国においても、フランスのように、女性の方が男優位と答える比率が大きい国がほとんどである。トルコでは、両者の差が27%ポイントに及んでいる。ただし、日本では、この差が10%ポイント未満であり、男女の回

図1 結局のところ幸せに暮らしているのは男か女か（国際比較）



注) 国順は、男とする回答率と女とする回答率の差の大きい順に並べた。全国比例抽出でない都市傾斜抽出国とその国の都市比率（調査対象、実際の人口）は、中国（67%、43%）、インド（77%、28%）、パキスタン（55%、33%）である。

資料) Pew Global Attitudes Project 「2010 Gender Report」(2010年7月1日)

答差は比較的小さい。

男女平等と女性の幸せとの相関

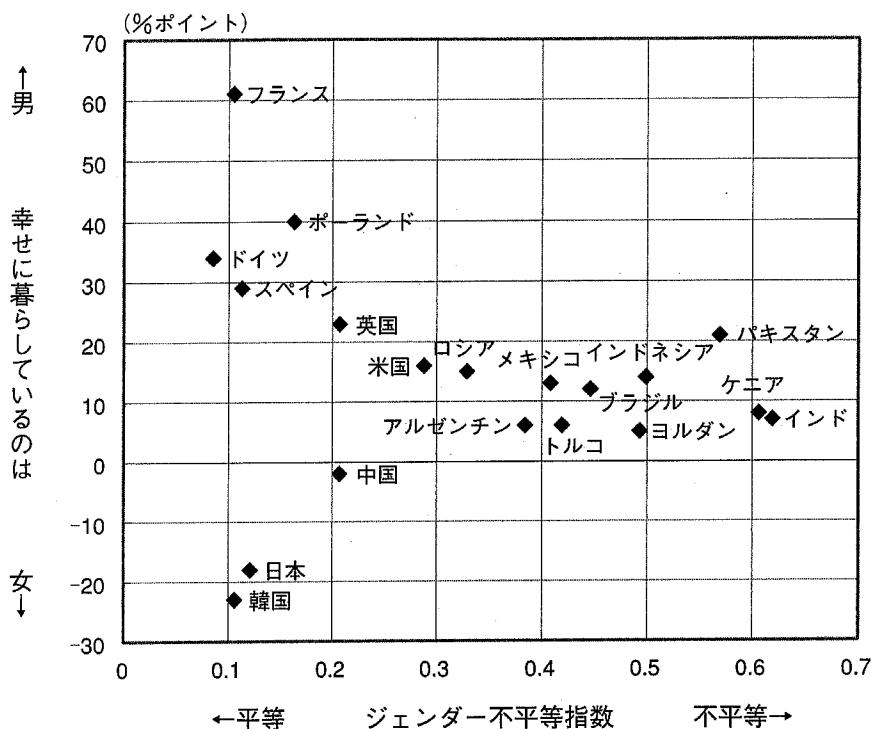
それでは、こうした男女の幸せ格差とも呼べるものは、男女差別とどのように関係しているのであろうか。

男女の不平等度とこの幸せ格差とがどのような関係にあるのかを探るために、X軸に、代表的な男女格差指標である国連開発計画(UNDP)のジェンダー不平等指数をとり、Y軸に上に掲げた意識上の幸せ格差をとった相関図を示した(図2)。ジェンダー不平等指数(GII)は、リプロダクティブ・ヘルス(妊娠婦死亡率、15～19歳出生率)、エンパワーメント(国会議席の男女比率、25歳以上男女の中等教育以上

履修率)、労働市場(男女労働力率)といった三つの次元、5指標の女性の不利を映し出す合成指数であり、0～1の範囲で男女の不平等度をあらわす。日本は、最新の2012年時点では148か国中21位であり、他の先進国と比べると、余り高いとはいえない。

結果は、当初の想定とは異なり、男女平等の国ほど女性が幸せであるとは決していえない。むしろ、不思議なことに、男が有利な状況におかれている国民ほど、幸せ度の男優位は小さいというパターンが認められる。ジェンダー不平等指数が0.3を境に、それ以下は先進国、それ以上は途上国にほぼ分けられる(中国は途上国だが、社会主义政策の結果、こうしたレベルに達していると考えられる)。相関度は高くない

図2 男女の不平等度と幸福度の相関（2010年）



注) Y軸は、男女どちらが「Better Life」を送っているかに関する男女の差。

資料) Pew Global Attitudes Project「2010 Gender Report」(2010年7月1日)

UNDP「Gender Inequality Index」(2012年までのデータの2010年値)

が、世界全体を見渡しても、また、先進国だけ取り出してみても、プラスというよりはマイナスの相関が見てとれるのである。

思い切って見方を変え、因果関係の方向を逆に考えてみよう。すなわち、男女不平等が女性の不幸せをもたらしている側面より、男性の不幸せが男女不平等をもたらしている側面の方が大きいのではないだろうか。つまり、何らかの理由で、そもそも男が不幸せな国ほど、ジェンダー不平等が看過されがちだという結論が得られないこともない。

男女平等と女性の幸せとの相関 (別データ)

こうした関係は、データの取り方や年次が異なっていても成り立つロバストものなのだろうか。本連載第7回では、年次は2005年と古

いが、男女別の幸福度を多くの国について観察した。このデータ(50か国)を、今回同様、ジェンダー不平等指数と関係づけてみよう(図3)。

今度の場合は、上と異なり、ジェンダー不平等指数0.3以下の先進国では、男女の幸福度の格差が、途上国と比較して小さくなっている(上下の幅が小さくなっている)。これは、先進国では、男女の幸福に対する「見方」ではなく、男女の幸福感の「実際」は、その振幅が途上国と比較して小さいためであろう。

男女の幸福度と不平等度の相関は、世界全体あるいは先進国だけ取り出した場合は無相関であるが、途上国だけを取ってみると上と同じようにマイナスの相関が認められる。

なお、ジェンダー不平等指数が0.3以下の国の中での男女の幸福度格差について、国別に2010年データと比較してみると、フランス、ポーランドが男優位の程度が高く、ドイツがこれに次ぎ、英米が相対的に低く、日本や韓国では女優位となるという構図は同じである。中国は2005年の男優位から2010年は女優位へとシフトしているが、これが経済発展にともなう実際の変化なのか、2010年調査では都市バイアスがかかっているためなのか、それとも幸福度格差の取り方の違いによるものなのかは分からない。

途上国だけを取ってみると、幸福度の男優位と男女不平等がマイナスの相関になっていると

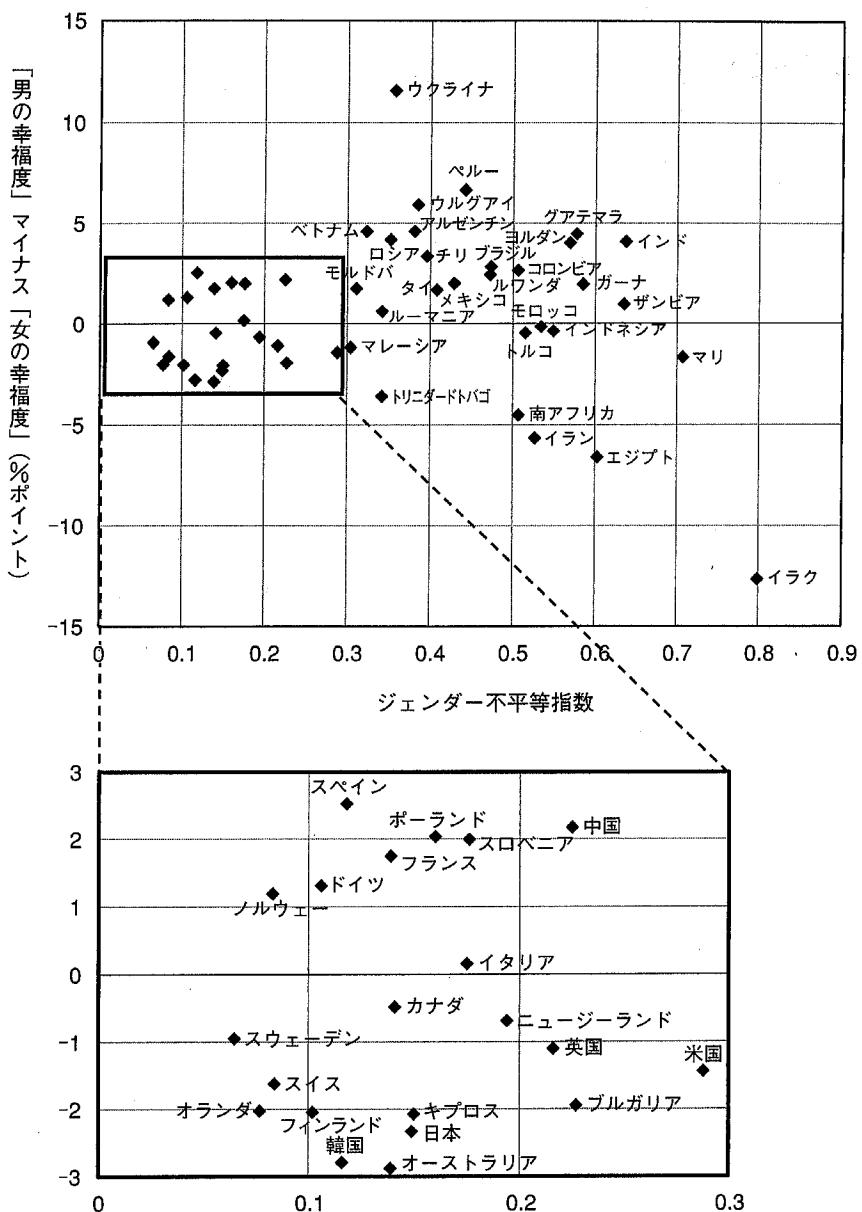
みられるのは、やはり、男が不幸を感じていると男女不平等の是正がなかなか進まないことをあらわしているといえよう。

まとめ

あくまで思考実験として、以上のデータから仮の結論をまとめてみると、次のようになる。「社会発展度の低い段階では、どうしても男が生活の確立のために集団抗争などで辛い役目を引き受けざるを得ないため、それを補うように男優位の社会が形成されてしまいがちである。その後、法治社会と国内平和が実現した先進国では、男の辛い役目は消えたのに男優位の体制だけが残存して、幸福度の男優位が目立つようになる。これでは不当なので、結果として、男女平等が進む。」

そこで、一般論として、男がもっと幸せを感じられるようになれば、男女平等社会への取組みはもっと本格化するのではないかだろうか。日本や韓国については、「実体的」というよりは「精神的」に男が解放され、もっと幸せを感じられるようになれば、男女共同参画社会にも、もっと早く近づくのではないだろうか。

図3 男女の幸福度と不平等度の相関（2005年）



注) 幸福度は、「非常に幸せ」または「やや幸せ」と回答した比率の計であり、各国の全国18歳以上の男女約1,000～2,000人を対象として実施された世界価値観調査（2005年前後）による。ジェンダー不平等指数は、国連開発計画（UNDP）によって指標化されているものであり、リプロダクティブ・ヘルス、エンパワーメント、労働市場といった三つの次元における女性の不利を映し出している。

資料) World Values Survey (<http://www.worldvaluessurvey.org/>) (2011年1月28日)
UNDP「Gender Inequality Index」(2012年までのデータの2005年値)

*参考文献

- [1] 本連載第7回（2012年1月号）：幸せはお金で買えるか。
- [2] 本連載第13回（2012年8月号）：男ばかりがなぜ自殺するようになったのか。